

2015年度 臨床宗教師 特別講義
『ホスピス・緩和ケアービハーラ病棟から』

講義名 ホスピス・緩和ケアービハーラ病棟から

開催日時 2015年5月27日（水）13:15～14:45

場所 龍谷大学 大宮学舎 清風館 B102 教室

講師 大嶋健三郎先生（緩和ケア医・あそかビハーラ病院長）

司会 鍋島直樹先生（龍谷大学 文学部 真宗学科教授）

主催 龍谷大学 人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター
龍谷大学大学院 実践真宗学研究科

協力 東北大学大学院 文学研究科 実践宗教学寄付講座
龍谷大学 世界仏教文化研究センター

【講義のポイント】

ホスピスは「死に場所」だと言われることがある。しかし、それ以上にそこは、患者さんが最後の瞬間まで生き抜く場所なのである。そして、医者、看護師、僧侶たちが、それぞれの知識と技術そして心をもって、患者さんが自分らしい生を全うするための手助けするところでもある。あそかビハーラ病院長の大嶋健三郎先生による、実際の医療現場を通じた、医と人間そして「いのち」に関する講義。

【講義の概要】

医者が、患者さんに余命を伝えることは非常に難しいことである。患者さんは、末期と知っても、年単位で考えていることが多い。あそかビハーラ病院では、患者さんの希望を支え、そして人生設計を誤らないように、彼ら（彼女ら）に、今一番したいことを先延ばしにしないように勧める。——これは患者さんに限らず、私たち自身にも当てはまることではないだろうか。

あそかビハーラ病院では「患者さんが歩んできた人生」「患者さんが大切にしてくられた日常生活」を大切にしている。自分にとって家族の次に大事だった野球をもう一度したいという男性患者さんや、バイクが大好きでツーリングがしたいという患者さんなどの、最後の「夢」を何とか叶えるために、医者、看護師、僧侶たちがチームとなって考え対応する。そして患者さんが、「良い時間を過ごせた」「自分らしい生を全うできた」と思えるように、最後の最後まで努力を惜しまないと、大嶋先生は言う。

チームは、決して医療者あるいは僧侶だけで作られるものではない。そこには、患者さん自身はもちろん、その家族も含まれる。手を握ること、日々の出来事を話すことなど、患者さんの家族にしかできないことはたくさんある。

患者さんとの信頼関係を築くことは非常に大切なことである。しかし、身体的にも気持ち的にも痛みと苦しみを負っている患者さんは、最初、心を開いてくれないこともある。「出て行け」と何も言わずに追い払うジェスチャーをする患者さん。「お前ら医者、治らないと分かったら逃げろ」と怒鳴る患者さん。そのような患者さんたちの心に向き合い、諦めず、寄り添っていくことで、最後には深い絆が生まれ、時として、医療者の方が患者さんから、魂の震えるような瞬間をもらうことさえある。

あそかビハラ病院で、お看取りする患者さんは、年間に約300人である。全国で、がんで亡くなっていく大勢の中の僅か300人かもしれない。それでも、その300人が、あそかでかけがえのない時間を過ごすことは、大変意義のあることである。

龍谷大卒で、現在あそかビハラ病院の事務主任でいらっしゃる藤田慶子さんは、「本気でいのちに向き合う人々から学ぶことはとても多い」、そして「何気ないお声がけで、患者さんやご家族のささやかな力になりたい。事務では、医療現場では分からない患者さんや家族の本音を聞くこともできる」と医療事務としての、仕事のやりがいと大切さを述べて下さった。

【まとめ】

過酷な現場であるにも関わらず、スクリーンに映し出された患者さん、そしてご家族の表情には、ある種の穏やかさが見られた。その背景には、あそかのスタッフと患者さん及びその家族との深い信頼関係があるからであろう。この深い信頼関係（患者さんと医療者あるいは患者さんの家族と医療者との関係のみならず、患者さんとその家族、医療スタッフ同士の関係なども含む）を築く、いわば潤滑油となるのが、僧侶の存在である。また、カンファレンスにおいて医療の都合のみに話が傾いてしまったとき、そのブレを修正するのも、僧侶の大事な役割である。

※あそかビハラ病院：2008年京都府城陽市に開設。2015年2月にISO9001を修得し、同年4月に緩和ケア病棟の認可を受けた。日本において、一般病院の敷地内を利用して設立される緩和ケア病棟が多い中、同病院は完全独立型であり、仏教系の病院としては初である。

【文責】 龍谷大学世界仏教文化研究センター
唐澤太輔